

《巻 頭 言》

成熟期を迎えた分析センター

分析センター長 三田村 孝

分析センターは本年4月で創立10周年を迎えた。ようやく揺籃期から成熟期に入ったところである。その節目をしっかりと刻む意味あいから、10周年記念事業を行う事となった。6月28日には大学会館で東大先端科学技術研究センター長の柳田教授による記念講演会、パネル分析機器展および本学教育学部藤川教授によるCACS FORUM（本センター機関紙）Vol. 1～9の表紙画展を開催して、多数の教職員、学生の参加をいただき本センターを大いに認識していただいた。年末には定例セミナーを企画している。このCACS FORUMもVol.10を10周年記念号と位置ずけて、かなり多くの先生方に執筆をお願いしてお蔭様でこのような立派なものとなった。

ここで、本センターに設置されている大型機器をみると、設立当初は4機種に過ぎなかったが、その後充実されて現在14機種となっている。近年、新素材・バイオ等についての研究熱は目覚ましいものがあり、本センターでも質の高い教育、研究を行いたいという目的から、「精密有機合成および生体機能物質の分子構造総合解析システム」および「表面分析総合解析システム」を導入することになり、この大方針に従って拡充しつつあるところである。14機種についての登録人数は昨年度で253名（内教職員98名）となっており、本センターが共同利用施設としての役割を果たせるように成長してきたことはご同慶のいたりである。また、学内の見学コースに加えていただき、とくに、この2、3年、本学説明会において理工系の受験生のうちに関心のある者数十名が見学しており、かなり評価されている。しかし、問題が無い訳ではない。例えば、設立当初の機器（1973～5年設置）は10数年以上も経過して老朽化し、故障も多く、機能的にも現在の基準にマッチしないものとなっている。しかも、これらの機種は分析にとって必須なものであるので早急に更新が望まれている。

成熟期を迎えた本センターの今後の展望についてふれるとすれば、組織の拡充、運営の合理化、大型機器の拡充に関することであり、これらが大きな課題となっている。全体構想として2部門、すなわち、「機器分析部門」および「国際研修部門」に発展して所員数の充実を計る。研究員会議を運営委員会及び専門委員会に改組して運営の効率化を図る。また、前述したように、大型機器については老朽機器を更新して充実すると同時に、二つのシステムのうち未設置の各種機器の早期設置を推進する。これらは、本センター関係者だけでできるものでないことは言うまでもない。関係学部等および事務局においても、深いご理解とご協力を切に望む次第である。

最後に、今後共分析センターを十分に御活用いただき、教育及び研究において大いなる成果を挙げられることをセンターとして期待するものである。